

クリの花

1. 訪れる昆虫

クリはカシやナラなどと同じく風媒花をつけるブナ科の植物ですが、例外的に虫媒花をつけます。蜜のありかを示す花弁はなく、たくさんの雄花が集まった白い花穂をたくさんつけて存在を示します。また、分泌するスペルミンで醸し出されるあの独特の匂いも、昆虫を呼ぶためのものです。

どんな昆虫が訪れ、花粉の運び屋をしているのでしょうか。蜜によって招かれる昆虫は、ハナバチやチョウ・ガの仲間が主ですが、クリ場合はちょっと変わっています。チョウでもアゲハやシロチョウではなく、ケモノの糞尿によく集まるヒョウモンチョウなどのタテハチョウ科や、トラ



クリの雄花に集まるハナムグリとアオハナムグリ



クリの雄花に集まるヒラタハナムグリ

フシジミなどのシジミチョウ科の仲間が集まります。また、白い花が好きな蜜食のカミキリムシや、花粉食のハナムグリやコガネムシの仲間も集まります。昆虫採集にはクリの花を目指して行くと良いくらいです。いろいろな種類が集まりますし、これらの昆虫を餌とするアブなどの捕虫性の昆虫も集まりますから、一石何鳥にもなるのです。高い場所に花が咲くのが欠点で、長い柄の網を持って出かけます。双眼鏡があると良いでしょう。

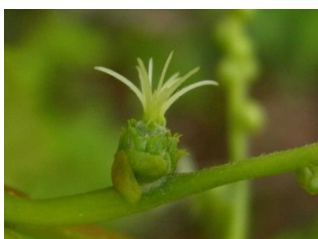
花穂が黄色になると終わりですので、白いものを観察しましょう。

2. イガ坊主

今年伸びた枝に花穂がつきますが、花穂のほとんどは雄花で構成されていて、雌花は少数です。勢いのない枝の花穂や元に近い場所の花穂は、雌花のないものもあります。クリのイガになる雌花の集まりは花穂の根元に1~2個付き、小さいながらすでに棘がわかります。その中に雌花が3個あり、白いめしべを外に伸ばしています。めしべの花柱の名残は、クリの硬い果皮の尖ったところに突き出て残っている部分です。



クリの雄花の集まり



3つの雌花の集まり

クリのイガは総苞(そうほう:単独の花では萼(がく)に相当し、複数の花をまとめて包むもの)の鱗片が棘状になったもので、どんぐりの帽子に相当するものです。シイのように堅果を完全に包み込み、熟すると4つに割れます。イガの中には3個のクリ、または受精しなかったため成長できず皿状になった果皮があり、3個の雌花が包み込まれていた証拠です。

大量のデンプンを蓄えるため、動物に餌として狙われます。イガは防御手段なのですが、クリの実には虫がよく入っています。柔らかいうちにイガを通して産卵するクリシギゾウムシです。幼虫はデンプンが蓄えられてから食べ始めるので、イガが弾けた後の食害が大きくなります。ネズミなどの哺乳類は貯蔵する習性があり、種子散布の報酬としてのデンプンは渋のタンニンが食欲を失わせ、食べ残しが発芽する作戦です。



成長を始めたばかりの実